

納税の流れ

奨励	望月 修治〔もちづき・しゅうじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団同志社大学教授

それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。税金に納めるお金を見せなさい。」彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らは、「皇帝のものです」と言った。すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らはこれを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った。

(マタイによる福音書 22章15―22節)

言葉の裏側

人が語る言葉は、心の内にある思いをそのまま映しだしているわけではありません。むしろ、言葉に現れたものと内にあるものとが違っていることが多いのであり、この食い違いに人間の本質があります。そしてこの言葉の表と裏の食い違いは、時に人を陥れるワナになることがあります。今日の聖書箇所にはイエスを窮地に追い込み、陥れるべく仕掛けられた言葉のワナを巡っての緊迫感に満ちたやりとりが語られています。ワナは、ローマ皇帝への税金を納めるべきか否かという問いかけのなかに仕掛けられました。この納税問題と絡めた仕掛けについて理解するためには、当時の政治的・社会的状況を押さえておくことが必要です。

イエスの時代の納税事情

まず、ごく基本的なことから申しますと、イエスの時代のユダヤはローマ帝国の支配下にありました。この点についてもう少し踏み込んでみますと、ユダヤが「ユダヤ州」としてローマ皇帝の直轄下に置かれ、ローマ帝国が直接治める属州のなかに組み入れられたのは、西暦6年のことです。そして、ローマはユダヤ州から税金を徴収するにあたっての査定のために「住民登録」を実施しました。この住民登録に基づいて、皇帝税がユダヤには課せられました。17節に「皇帝に税金を納める」とあるのは、この皇帝税のことです。さらにこの皇帝税を巡って、ユダヤ教の各派（派閥）の思惑の違いが絡み合って、当時の政治的状況のなかで相対立する動きとなって表面化していました。15―16節に「ファリサイ派」「ヘロデ派」という二つの派閥の名前が出てきますが、この両者は皇帝税を納入すべきか否かに関しては、全く正反対の立場にありました。ファリサイ派というのは律法学者たちのエリート集団で、律法を知らない「不浄な民」から自らを「分離」して（ファリサイとは「分離」を意味するヘブライ語「バルシーム」に由来）その「清さ」を誇っていました。ファリサイ派は、皇帝税を納入することには反対の立場を表明していました。このファリサイ派のなかの過激派が、熱心党（ゼロータイ）と呼ばれたグループです。イエスの弟子のなかの一人に熱心党のシモンという人物がいたと伝えられているが、熱心党というのはその名が示すとおり、律法に対する熱心さから、ローマ皇帝に税金を納めるなどんでもないことだとして実力行使に出たグループです。ローマ人をはじめとする異邦人や、これに協力するユダヤ人を殺害するという行動もとりました。また西暦66年に、ローマ帝国に反旗を翻して全面蜂起するという事態にまでエスカレートしました。この熱心党から見れば許されざる立場にいたのが、16節に出てくるもう一つの派閥であるヘロデ派です。このグループはヘロデ派という名前からも分かりますように、ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスの支持集団であり、ヘロデはローマ皇帝の息のかかった傀儡（くぐつ）（操り人形）でしたから、「ヘロデ派」は当然、皇帝税に関してはこれを容認する立場にありました。ローマとは妥協的な立場にありました。ファリサイ派とヘロデ派というのは皇帝税を巡っては正反対の立場にあったことはお分かりいただけたと思います。

巧妙な仕掛け

この両派が今、揃ってイエスの前に立っているというのが今日の場面です。したがって、これは出だしからかなりきな臭い状況であることが分かります。この両派の面々が、イエスのもとにやって来てこう言っています。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです」。まことに麗しい言葉であり、丁寧で、イエスに対する尊敬をにじませた言葉であるように聞こえます。しかしこれは、彼らがイエスに仕掛けようとする言葉のワナを隠すためのお世辞です。「ところで」と彼らは言葉を切り返して、皇帝税の問題を引き合いに出して、イエスにワナを仕掛けるのです。「ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」。税金の背後には権力を握った者たちがいます。イエスの時代のユダヤの人びとは、二重三重の支配に押さえ込まれていました。まずはローマ皇帝への皇帝税（14歳から65歳までの男子と12歳から65歳までの女子が毎年一人1デナリオン）、領主ヘロデへの国内税、エルサレム神殿への神殿税、さらに徴税人たちは通行税を取り立て、またカペナウムなど要所要所に設けられた関所で関税が巻き上げられるといった具合でした。この両派の面々が、イエスのもとにやって来てこう言っています。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです」。まことに麗しい言葉であり、丁寧で、イエスに対する尊敬をにじませた言葉であるように聞こえます。しかしこれは、彼らがイエスに仕掛けようとする言葉のワナを隠すためのお世辞です。「ところで」と彼らは言葉を切り返して、皇帝税の問題を引き合いに出して、イエスにワナを仕掛けるのです。「ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」。税金の背後には権力を握った者たちがいます。イエスの時代のユダヤの人びとは、二重三重の支配に押さえ込まれていました。まずはローマ皇帝への皇帝税（14歳から65歳までの男子と12歳から65歳までの女子が毎年一人1デナリオン）、領主ヘロデへの国内税、エルサレム神殿への神殿税、さらに徴税人たちは通行税を取り立て、またカペナウムなど要所要所に設けられた関所で関税が巻き上げられるといった具合でした。このような状況でイエスに投げかけられたのが、皇帝税納入の是非を問うファリサイ派、ヘロデ派双方の声を揃えた問いかけだったのです。もしイエスが「皇帝税など納めなくてもよい」と答えたら、彼らはイエスをローマへの反抗を煽動し煽り立てる危険人物として、当局に訴えることができます。一方、「納めることはよいことだ。納めるべきだ」と答えたとするならば、税金にあえぎ、そこからの解放を願っているユダヤの民衆から、イエスは裏切り者として追放される結果を招くことになります。どちらに答えてもイエスの立場は悪くなる、窮地に追い込まれることになるという、まことに巧妙なワナが仕掛けられたのです。

銀貨の裏表

イエスは彼らの下心を見抜いて「なぜ、わたしを試そうとするのか」と問い、さらにデナリオン銀貨の提示を求めます。「デナリオン」はローマ通貨の1単位で、それは1枚の銀貨でした。イエスはこの銀貨を指して「これは誰の肖像と銘か」と尋ねると、彼らは「皇帝のものです」と答えます。このデナリオン銀貨は、日本の貨幣で申しますと1円玉とほぼ同じ大きさで、その表面には皇帝ティベリウス（AD14―37在位）の胸像が浮き彫りにされていました。また裏面には、ティベリウスの母であり皇帝アウグストゥスの妻であったリウィア・アウグスタの像が浮き彫りにされていました。さらに、この銀貨の裏表に刻まれた銘は、全体として「崇高なる神の子、崇高なる皇帝にして大祭司なるティベリウス」と読めるのです。

神のものは神に返す

デナリオン銀貨の肖像と刻まれた銘が「皇帝のもの」であることを確認したうえで、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えます。このイエスの答えをどのように読み、解釈するのが今日の箇所のポイントになります。一つの読み方は、ここでイエスは政治と宗教とを分けて、双方の領域でそれぞれ課せられている義務をきちんと果たすことを勧めたと解釈する立場です。これに対して、いやそうではない。政治と宗教とは横並びではなく、あくまで宗教にかかわることが優先するのだ。「神のものは神に返す」という原則がすべてのものに先行するという立場にイエスは立っているのだ、という解釈もあります。つまり、「神のものは神に返す」という原則に抵触しない限り政治的な権力を承認するけれども、権力がこの原則に踏み込んだ要求をしてきたときは、これを拒否するという姿勢をもつということです。私は次のように読むことが、イエスの真意に沿っていると思っています。「あなたがたが自分の存在をローマ皇帝に負っているのであるならば、その負債を皇帝に返したらよい。自分の存在を神に負っているのであれば、その負債を神に返したらよいだろう」という意味に読むのです。そしてこう思うのです。「お国のために、国の平和のために命を捧げることは尊いことだ」という理屈のもとに戦争が繰り返されてきました。しかし、人の命は国や皇帝に捧げるものではなく、創り主である神にのみ返すべきものだということです。与えられた人生を最後まで十分に生きて、そして感謝して神に託していくものであるはずです。

9月の初めに沖縄に行ってきました。京都教区が1年おきに行っている沖縄現地研修に参加して、3泊4日の日程で沖縄本島の南部戦跡を巡り、3日目には宮古島に出かけました。私にとっては11回目の沖縄でした。オスプレイ配備が間近に迫っていた時で、オスプレイの配備に反対する県民集会への参加を呼びかける立て看板が置かれていました。沖縄本島の宜野湾海浜公園で開かれた反対集会に10万人、宮古島での反対集会には7700人余が参加したと報じられていました。

今年の夏は、太平洋戦争での敗戦から67年目の夏でした。沖縄についてこの戦争を辿り直す、その意味を今回の沖縄での研修でも思い巡らしました。1945年4月1日の沖縄本島への米軍上陸に始まった戦闘は、生き地獄、いや地獄を超えるとさえ言われた惨状をもたらしました。兵士9万人、住民11万人、合わせて20数万人を超す死者が出ました。第1日目、宜野湾市にある佐喜真（さきま）美術館に行きました。米軍の普天間基地の片隅に位置する美術館ですが、これは米軍基地の一部を地主である佐喜真さんが返還要求して、返ってきた土地に設立された私設美術館です。原爆の図の作者としても知られる丸木（まるき）位里（いり）さん・俊さんご夫妻が描かれた「沖縄戦の図」が常設展示されています。館長の佐喜真道夫さんが、美術館を訪れた修学旅行生や私たちのような研修の旅で訪れる者に「沖縄戦の図」についてお話をしてくださいます。今回もお話をお聞きすることができました。私自身は佐喜真さんのお話をお聞きするのは4回目か5回目でしたが、いつも思うのは、そのお話は、過去のままではなく今の話だということです。佐喜真さんは過去のままではなく、沖縄で新しい今を歩んでおられる、そして「沖縄戦の図」とも新しく向き合い続けておられて、その思いを訪れた者に語ってくださるのです。そのことを今回も感じました。沖縄戦では11万人を超す住民が戦闘で命を落としたのですが、その実態について佐喜真さんは語ってくださいました。1945年4月に戦闘が始まり、5月には日本兵の7割がすでに戦死していました。戦争で兵士の3割が死んだらその戦争は終わりというのが世界の常識でした。ところが、日本の大本営は本土決戦の時間稼ぎのために戦闘の続行を命じました。沖縄戦で亡くなった住民8割は、この5月以降の戦闘で命を落としました。もし5月の段階で戦争をやめていたら、この8割の人たちは命を落とさずに済んだはずでした。「沖縄戦の図」は1983年から1984年にかけて描かれました。丸木位里さん・俊さんはこの絵を、沖縄戦を体験した人たちとの共同の作品だと語っておられたと言います。一人の兵士もそこに描かれていません。すべて住民の方たちです。佐喜真美術館が開館してから、この「沖縄戦の図」もモデルになった人たちが美術館を訪れてくださって、それぞれの戦争体験を話してくださいました。だからこの絵にはたくさんの戦争体験の物語が入っているのだ、と佐喜真さんは語ってくださいました。美術館の一番奥の部屋の壁一面を占める大きな絵の左下に、丸木位里さん・俊さんが書き込まれた言葉があります。この言葉に最初に出会った時の衝撃を、私は忘れられないでいます。この絵と向き合う度にその言葉を何回と読むのですが、今回は手帳に書き写しました。最初の時そうように、再び手帳に書き写しました。

「辱めを受けぬ前に死ね／手りゅうだん 下さい／鎌 鋏で カミソリでやれ／親は子を 夫は妻を 若ものはとしよりを／エメラルドの海は紅に／集団自決とは／手を下さない 虐殺である」

イエスが見た現実

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」。イエスはこの言葉をただ頭のなかで理屈として考えて語ったのではないと思っています。人の手によって人の命があしらわれ、追いやられ、奪われていく、その現実をイエスは幾度も見たのではないか。それゆえの悲しみと、それゆえの怒りを宿しながら「神のものは神に返すべきだ」と語ったのではないか。人の命は最後まで十分に用いられ、その後に神の手に返されるべきもの、託されていくべきものであるという思いを、イエスは一生懸命語ろうとしたのではないか。沖縄に出かけ、そこで与えられた出会いと向き合いは、イエスのこの言葉をそのように聞くことを私に促し続けています。

2012年11月14日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録